

(京都西南部)

京都・長岡京跡右京六条二坊六町

ながおかきょう

うきょう

- 所在地 京都府長岡京市開田四丁目
- 調査期間 右京第五六五次調査 一九九七年（平9）五月
- 発掘機関 財長岡京市埋蔵文化財センター
- 調査担当者 木村泰彦
- 遺跡の種類 都城跡
- 遺跡の年代 長岡京期（七八四～七九四年）
- 遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査区は、長岡京跡右京六条二坊六町西南部、及びその西南の西二坊坊間小路と六条条間南小路の交差点にあたる。地表下約一・二

mで長岡京期の遺構面に至り、両小路ともに道路幅は溝心々で約九m（三丈）で、長岡京の一般的な小路の規模であることが判明した。

このうち南北道路である西二坊坊間小路の両側溝は交差点上を横切っているが、東西道路の六条条間南小路

は西二坊坊間小路上の両側溝で途切れており、西二坊坊間小路が優先されていたことが判明した。今回の調査地では南がかなり低くなっていることから、南側への排水が重要視されたために南北道路が優先されたものと考えられる。また六条条間南小路は、北側溝では北側に、南側溝では南側に、ともに宅地側だけに側板と杭による護岸がなされていた。西二坊坊間小路には明確な護岸施設は見られないと、これは側板を上下二段に重ねて杭で留めており、幅を狭めて作り替えがなされている。当初に作られたものは東側のみが残り、長短合わせて八枚の板を使用し、四～五本の杭で留めたもので、全体の長さは二・八m、高さは〇・三mを測る。当初の溝幅は約一・五m程であったと推定される。作り替えられたものは一回り小さく、東西ともに四枚の板をそれぞれ三本の杭で留める。長さ二・二m、高さ〇・三m、溝幅は一・二mである。東西合わせて八枚の側板のうち二枚と四枚がそれぞれ接合関係にある。これらは柱状の木材を折り取ったものである。この他には西二坊坊間小路の路面上で、轍・足跡なども検出されている。

遺物は西二坊坊間小路と六条条間南小路の側溝を中心に大量に出土しており、特に西二坊坊間小路の東側溝の橋状遺構周辺に多く認められる。最も多いのが土師器・須恵器の食器類で、他には黒色土器・綠釉陶器・灰釉陶器・墨書土器・土錘・羽釜・竈・ミニチュア

竈・土馬・墨書人面土器・瓦・輔羽口・炉壁・万年通宝・神功開

宝・木簡・人形・斎串・曲物・櫛・建築部材・加工木・砥石などが

ある。このうち墨書土器で判読できたものとしては、「淨」「福」「長」「井」「一」「十」などがある。木簡は橋状遺構の周辺で二点出土した。

8 木簡の釈文・内容

(1) □入趣□

(55)×(12)×1.5 081

□□□ 古文孝經一□

(246)×19×1.5 081

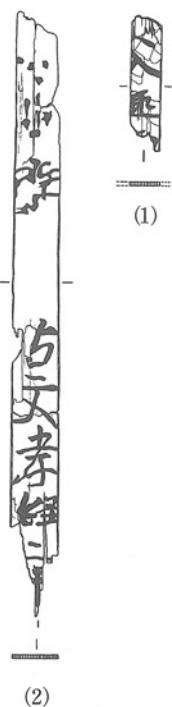
(1)は、上下左右を欠失する小片で、「入趣」の二文字が判読できる。さらに上下に一字ずつ確認できるが判読不能である。

(2)は上下端を欠くものの、比較的良好に残っている。上半部に判読できない三文字があり、少し間隔を空けて「古文孝經二」を読みとることができる。

「孝經」は孔子が弟子に述べた孝道をその門人が記録したものといわれ、「今文孝經」と「古文孝經」の二種が伝わり、今回出土し

た木簡には「古文孝經」の名が記されていた。養老学令では「孝

經」は「論語」とともに学生の必修とされており、天平宝字元年(七五七)には、家ごとに「孝經」一本を蔵め、精勤誦習するべき旨の詔が発せられている(『続日本紀』天平宝字元年四月辛巳条)。従つ



て当調査地の周辺に「古文孝經」を使用ないし保管する施設が存在した可能性が考えられる。

当調査地一帯は、以前から中山修一氏によつて長岡京の西市に推定されている場所であり、これまでの周辺の各調査地において、「金銀帳」、「(表)自司進□/ (裏)三年十二」と書かれた木簡や「西」と記された墨書土器などがそれぞれ出土している(本誌第五・一五号)。このことから今回の「古文孝經」木簡については、市との関連も考慮に入れて検討していく必要がある。

なお木簡・墨書土器の釈読に関しては、向日市教育委員会の清水みき氏よりご教示を得た。

(木村泰彦)